

受講番号 18025 学校名 高知追手前高等学校 氏名 西山 忠義

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 2年生(人文・科学) 生徒数 28 名
科目名 英語 単位数(授業時数) 4 時間 使用教科書名 PROMINENCE ・ Voyager Reading Course

クラスの様子・特徴

教科書早期採択によって1年次にすでに英語の内容に入っており、2年次における英語の学習は夏休みまでに終了している。12月現在でReadingの半分以上が終了し、3年次からは演習問題に取り組むことになる。内容読解と音読に重点を置いている。

問題の確定

英語の運用能力と語彙力は密接な関係があり、内容理解の為に、その中の95～98%が既知語でなければならない。

予備調査

A 授業の観察

授業はほぼシラバス通りに進められている。1年次と異なっている点は、「オウ単」と呼ばれる独自の単語帳に市販の単語帳を加えて毎時間単語テストを行い、また毎週金曜日には「金曜テスト」と呼ばれる単語、文法のテストを行っているという点である。

B 生徒による授業評価

昨年度担当教員が本年度も持ち上がるという形態がしかれている。授業も横並びでほぼどのクラスも同じ授業展開がなされており、授業の進め方の不満はない。多くの生徒は小テストによる多忙感を感じてはいるが、根気強く取り組んでいる。

C 学力データ

習熟度別の授業を行っており、現在受け持っているクラスは学年全体から見ると下位層の生徒であるが、ほぼ全員が国公立大学を目指しており、11月模試のデータで見ると偏差値55～50程度の学力を持った生徒の集団である。

リサーチ・クエスト

語彙を増やす取り組み

仮説・実践・検証

仮説1

授業中に「オウ単」と呼ばれる教科書を加工した独自の単語帳を使用することによって内容読解や音読が容易になり、教科書レベルの語彙を定着させることができるであろう。

実践1

昨年度から継続的に行っている。授業導入時にいろいろなバリエーションを加えながらほぼ毎時間行った。また小テストで出題したり、定期テストにも出題し教科書語彙の完全定着を図った。

検証1

音声を中心とした平時の取り組みでは活発にペアワークに取り組んでいるが、ペーパーテストになるとスプリングの間違いがいくつか見られ、音声と文字が一致していない感があった。模擬試験においては7月に比べて11月模試では長文での読解力が伸びている生徒が多く、アンケートにも長文が読めるようになったと答えた生徒もいる。

仮説2

英単語テストの年間計画を作成し、毎時間何回も繰り返し行うことによって語彙力が強化され、英語力向上に繋がるであろう。

実践2

1回の小テストの範囲を4ページ分とし、1週間で3回、つまり12ページ分(約75語)の語彙に触れさせ、金曜日にその週の範囲をもう一度復習する「金曜テスト」を行っている。年間で90回以上の単語テスト、30回以上の金曜テストを計画し、現在も継続中である。

検証2

習慣化された小テストに対して十分な学習をせずに臨み、語彙の伸長があまり見られない生徒がいた。いつまで経ってもカンや当てずっぽうで英文を読む作業を続けている限りは生徒たちが目指している大学への道は開けてこないことを分らせるべきである。

仮説3

毎時間の英単語テストの記録を付けさせることで学習へのモチベーションを保つことができるであろう。

実践3

4月～7月、8月～12月と得点記入用紙を作成し単語テスト、金曜テストの推移が分かるように記入させた。しかし、用紙をなくす生徒も多く、チェックに時間を要するために、途中から小テストにコメントと週間、月間の平均点を記入して返却するようにした。

検証3

当初の指導が徹底ができず、モチベーションが保たれたという生徒がほとんどいなかった。モチベーションというより、毎時間行うことによって日々のノルマとして習慣化されていたようである。週間、月間の平均点や刺激的なコメントを記入して返却したことは直接的な刺激にはなっただけである。

研究の成果

12月現在までに70回以上の英単語テストを行ってきた。模擬試験の結果を見ると例年よりも僅かに良いだけであるが、後の語彙におけるアンケートにおいて興味深いデータが表れた。成績上位者は文字から意味を認識できる割合が高く、一方で下位者は文字から意味を認識できなくても、音を聞いて意味が分かる場合があることが多いというのだ。これは、文字と音がかけ離れているという低学力者に多い傾向ではないか。これは授業における語彙指導のヒントであり、今後は文字と音の関係や音声での導入を試みたい。

今後の授業改善の課題

学習者が繰り返し該当語に接し、また語彙の定着を図るためには反復しかない。人間の記憶を考慮してみても、古い情報は再度取り出されない限り忘却の一途をたどっていく。そういったことを防ぐために反復はもちろん、語彙の諸側面、つまり文字、音声、意味、語法などといったさまざまな角度からのアプローチを試みたり、授業内に取り入れる英語の量を増やすことによって場面と結びついたInputができるのではないだろうか。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-873-6141

電子メール

tadayoshi_nishiyama@kt3.kochinet.ed.jp